

山びこ通信

6月号
2005.5.31

第2回 ミニミニようちえん



「ようちえんであそぼう・パート2!」(無料)

6月4日(土) 午前10時~11時

ブランコ、グローブジャングル、おすなば、おままごとのおもちゃ、などなど。ようちえんのお庭で、おかあさんや先生たちといっしょに、たのしくあそびましょう!

(雨天でも、おへやあそびのメニューを用意しています)

第3回 山びこクラブ



「ダンボールのおしろを作ろう!」(無料)

6月24日(金) 午後4時~5時30分

大きいダンボールに、小さいダンボール。ガムテープでべたべたはって、ゆめをふくらまそう! みんなで「きょうりょく」したら、きっとすごいものができあがるよ!

青春ライブ授業! (無料)



7月15日(金) 午後7時~8時30分

「なんで歴史を学ぶか?」

某(山の学校講師/京都大学文学部4回生)

場所 第3園舎(つき組の部屋)

対象 中学・高校生・保護者一般

クラスだより・小1『ことば』

担当 山下太郎

「ことば」の小1クラスでは、子どもたちに親しみのある俳句や絵本、紙芝居を紹介しながら、「楽しく言葉にふれること」をモットーにしています。

初めに新しい俳句一首を紹介し、全員でこれを繰り返します。何度も声を合わせて復唱していると、ちょうど音楽の歌詞を覚えるように、誰もが自信をもって暗唱できるようになります。

腹の底から声を出すと自然に大きな音になりますが、街中とは違い、山の緑がどこまでも優しく包んでくれるかのようです。「今の（大きな）声、山のてっぺんまで聞こえたかな？」 いつも、誰かが得意そうにこの台詞を言います。気心の知れた仲間と一緒に俳句を朗唱する経験は、大人になってから、山の風景と共に懐かしく思い出することができるでしょう。

俳句の次は、絵本と紙芝居の時間です。日本の昔話やグリムやアンデルセンの作品をアレンジした絵本や紙芝居を選んでいきます。絵本1つと紙芝居1つでちょうど時間いっぱいになります。

俳句を通して「言葉」のもつ美しさやリズム感を感じ取ることができるとすれば、絵本や紙芝居の読み聞かせを通し、子どもたちは「物語」の楽しさに触れることができます。起承転結のついた物語展開に何度も何度も接することによって、物語の「先を読む」能力が着実に形成されていきます。この点、テレビやビデオでは、立ち止まって先を読む必要もなく、また、その「考える」時間さえ奪われているので、これらのメディアに接すれば接するほど、子どもたちの「先読み能力」は乏しく貧弱なものになっていきます。

このようなわけで、私は絵本や紙芝居を読む際、新しいページや場面に移る前にいったん話をとめ、「次はどうなるでしょうか？」と期待を持たせるように合いの手を入れるようにしています。すると、あっちからこっちから、「次はこうなるんやで」、「いや違う、こうなるはずや」とめいめい私に「教えて」くれます。こうして期待のボルテージが最高潮に達した段階でページをめくると・・・子どもたちの期待通りに展開すればそれはそれでよし、まったく予想を裏切る展開になっていたとしても、それもよしです。

余談ですが、今ふれた「物語の先読み能力」は、学校教育において、とくに国語と英語の学習において、後々計り知れない恩恵をもたらします。たとえば、この能力が豊かに備わった生徒は短時間で要点を見抜く力、速読力に長けており、国語や英語の長文読解を苦にすることが少ないものです。しかしそれを培う原動力は、何より各家庭での会話や「読み聞かせ」の習慣 子どもではなく保護者がその鍵を握っているにほかならないことをここに強調しておきたいと思います。

意外に思われるかも知れませんが、小学校に上がっても、子どもたちは親に「本を読んで！」とせがみます。これは「甘え」ではありません。まだ、「先読み能力」の未熟な子どもたちは「言葉の授乳」を渴望しているのです。このとき、色々な理由をつけて「自分で読みなさい」と突き放すのは子どもにとってかわいそうなことです。いずれ、「先読み能力」に自信が持てるようになれば、放っておいても一人で本を読むようになります。それが身についていない段階で「自分で読みなさい」、「たくさん読みなさい」と言うのは、酷なことなのです。乳児への授乳を「甘やかし」と称する人はいないように、子どもへの読み聞かせの習慣は、いかなる教材、いかなる教育メソッド 私の授業も含む！ にも勝る最高の教育なのだと私は思います。

さて、前回の「ことば」のクラスでは、アンデルセンの『人魚姫』の絵本(いわさきちひろの挿し絵が美しい)を読みました。私自身この作品の正確なあらすじはすっかり忘れていたのですが、読み進めるにつれ、子どもが理解するにはたいへん複雑な筋の展開になっていることに気づきました。最後に人魚姫が泡となって消えるところまで、正確に筋を覚えている大人は意外に少ないのではないのでしょうか。

ところが、一人の女の子がこの話をよく知っていて、ページをめくるときに「これは次にこうなるのよ」と合いの手を入れ、筋の展開を正確に言い当てたのには驚かされました。また、その女の子の話しぶりを他の子どもたちも静かに聞き入っていたのが印象に残っています。このような子どもたちの様々な合いの手 紙芝居の大蛇の絵を見て、「せんせー、あんなー、ぼくきのう、へびみたでー」等も含む は、そのどれもが快い「場」の空気を作り上げ、絵本や紙芝居の魅力を全員で余す所なく分かち合う上で、不可欠のスパイスになっています。

(山下太郎)

「しぜん」だより

山下育子(山の学校 しぜんクラス担当)

今年度の<しぜんクラス>は、『春だなあ!』というテーマで、第1日目4月12日より12名のメンバーでスタートしました。4月5月と、自然からの恵みの春をいろんな角度から感じ、みんなで賑やかに楽しんでいるところです。

毎回クラスのはじめは、古新聞、雑誌などの記事から興味をもったことやみんなに伝えたい内容を見つけ、お家でスクラップノートに貼ってきたものを発表してもらいます。それを受けて、子どもたちは思い思いのコメントを交わしながら「しぜん」の話題が広がっています。



たくさんの記事、タイガーウッズも!!



大きな落ち葉! ビニールに入れてベタリ



「これはですねー」と説明つきです。

メンバーと共有した、お山の中での自然体験の一日をご紹介します。

“よもぎだんごをつくろう!” ある4月のクラス

「よもぎって、どんな葉っぱか知ってる?」 『知ってる、道に生えてる。』 『公園で見たよ。』
『ギザギサした葉っぱや。』

*「よもぎ」は、キク科の植物。本州~小笠原諸島にかけて分布。花期は8~10月。50~100cmになる。
いろいろな種類があるが、春には草餅にしたり、お風呂に入れたり、灸のモグサに利用される。

お山のあちこちで、春の新芽を出して大きくなってきたよもぎ。確かに生のよもぎはお店などでは見かけることはありません。その、よもぎの葉を、目、鼻、手の感触でよく確かめながら摘みとって、つづいて、自然の恵みからなる材料(粉、水)を使って“よもぎ団子”を作ろう! ということになりました。

「それじゃ、このお山のどの辺によもぎが生えてるかなあ? 早速みんなで探しにいきましょう。ブタクサと間違えないように。」



あるよあるよ。えっ、どれ?



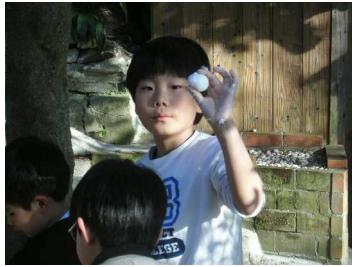
だいぶん、とれた



竹の子もついでにゲット!

「順番に並んで、手を洗ったらあちらのテーブルへ行きます。材料は、白玉粉、水、よもぎ。さあ、作りましょう!」





このくらいがいいね



力がこもるぞ、ポーズ



よもぎの匂いがかかった



よもぎも混ぜて、よいしょ、よいしょ。



柔らかすぎないようにやさしくコロコロ



こんなに大きいのはどう？



茹であがりましたよー



小豆もそえて



ん〜。美味しい！

* * * * *

『よもぎっていい匂い。』『葉っぱの裏が白くてフワフワしてる。』
『こんなに採ったらかわいそう？』『大事にしよう。』

などなど、おしゃべりを続けながら春草の上を目で追いました。よもぎの香りに包まれること約10分ほどで、ポウルにドッサリと葉が集まっていた。教室の玄関前に戻り、手を洗った人から二人一組でペアになり、大きなポウルの中の白玉粉に適量の水を足しながら協力してこねていきました。途中、さっと湯通してから刻んだよもぎが加わります。

『あっ、茹でたよもぎの匂い、さっきの(摘んでた時)と違うよ』『みどり色のお団子になってきた』

作業をつづけながら、口々に感想が出てきます。こねるのは結構の力があるからなかなか大変です。全部うまく丸められたところから、湯立ったお鍋の中に一つ一つ手で大事そうに落としていきました。2〜3分して浮き上がったら茹で上がったしるし、あと1〜2分まってからすくい上げ、冷たいお水につけました。

ふっくらと柔らかな出来映えは、なかなかのもの。よもぎの緑が鮮やかなホカホカのお団子に、少し甘い小豆をのせて、自然の恵みを賞味しました。ちょうど西山へ沈む夕陽が、子どもたちの笑顔をキラキラ照らしていました。

(山下育子)

クラスだよ！・小1～3『かず』

小2～3かず担当 福西亮馬

2・3年生クラスで、ドリルをしている時のことです。

「せんせい、はよう、まるつけてー」

ある生徒の声です。私は、別の生徒への説明が終わると、はいはいと、声のする方に寄っていきました。その時ふと、去年ならば、よくその生徒のそばに座っていたことを思い出したのでした。

「はい、まる。これも、まる。えらいなあ。この計算、去年むずかしかったところやのに、わかるようになったんや...」

「お母さんが、『このやり方でええよ』って、言わはったん」

「そうかあ。お母さんのそのやり方で、あってるんやで。...はい、ぜんぶまる」

私は、その子の心の中に、お母さんとのやり取りを聞くような思いがしました。春休みに、お母さんと一緒に解き終えた1冊で、よほど自信がついたのだらうと思います。

今では反対に、私が間接的に見ている時間の方が増えました。そして黙ってしている時は、心の中のお母さんが見ておられるのだらうと感ずるのです。先週も、知らぬ間に9ページ分も宿題をして来られ、もう2冊目のドリルを終えようとしています。

下村先生が担当されている1年生たちも、今は頑張っています。しかし彼らの頑張りもそうですが、私は、お子さんについて見ておられる保護者の方のひたむきさに、いつも頭の下る思いがするのです。

今でも継続して、宿題を欠かさずにして来られることは素晴らしいことです。本当にありがたいことです。

「お家ではこうしているのですが、最近になるとこうなので...。だからこうしてみようかと思うのですが...」

といったエピソードの一つ一つが、子どもたちにだけでなく、私たちにも、頑張ろうという励みになっています。そして来週の教室で、子どもたちから宿題を見せてもらう時にまた、

「日曜日にお母さんに見てもらった。こないだは、お父さんとした」

というような声を子どもたちからも聞くと、私もまた、いつか親からそうしてもらったことを思い出して、無性に嬉しくなるのです。

どうかこの調子で、山の学校だけでなく、お家でも、勉強の習慣をつけてあげて下さい。それには、それぞれのお家で、お子さんとルールを作るのが良いと思います。おそらく、ドリルが後の方になればなるほど、子どもたちの「むずかしい」と感ずることが多くなり、説明にも倍の時間がかかります。けれども決してゼロにはしないようにしていれば、いつかドリルは終わります。

そして1冊を乗りこえれば、そこから見える景色が全然変わってきます。それまで一緒に頑張りましょう。

